

オーテス・ケリー先生を偲ぶ

大学名誉教授
北垣宗治

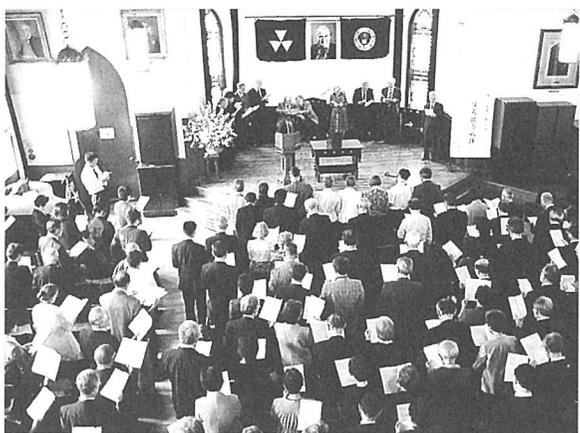
記念礼拝

ケリー先生が亡くなった4月14日金曜日は、イエスが十字架上の死を遂げたことを記念する「グッド・フライデー」であった。祖父母、父母が日本における宣教師だったケリー先生に、それはふさわしい日だったといえるかもしれない。

生前先生と特に親しかった4人の仲間、すなわち竹中正夫、榊原胖夫、藤倉皓一郎の諸氏と私とが発起人となり、先生の永眠を記念する礼拝を持つという相談がまとまり、先生の次女で豊中在住のアン・ケリーさんを窓口としてケリー家と連絡を取りつつ、6月3日（土）の午後、同志社礼拝堂で、という案がまとまった。記念礼拝では竹中名誉教授が説教者となり、何人かの人に感話をお願いする、司会は北垣が務める、ということ準備を進めてきた。学校法人同志社では、植田弘事務部長が親身になって支援してくださった。

6月3日はかなりむし暑い日だった。ケリー家では、アリス・ケリー夫人の発案で、参会者に礼拝堂の入り口で入場前に記念品としてケリー先生のネーム入りの扇子を配ることにし、この扇子はどうぞ礼拝中自由にご使用ください、というアナウンスを入れた。

午後2時半から「オーテス・ケリー帰天記念礼拝」が神戸女学院（ケリー先生が長年にわたり理事を務めた）のオルガニスト前田直子さんによる厳かな前奏をもって始まった。会衆一同で、先生が思慕したラインホルド・ニーバーの愛唱賛美歌「地に住める神の子ら」を歌ったのち、ヘイ祈祷」を英語で唱えた。アームストロング出身で、桜美林大学教授である三谷高康牧師が義父の略歴を紹介し、祈りを捧げた。アームストロング大学のアンソニー・マークス学長からのメッセージを同志社におけるアームストロング代表である樋口秀雄名誉教授が紹介したのち、大谷實総長が同志社を代表して感話を述べ、次いで参加者の中では最も古い友人



同志社礼拝堂での「ケリー先生帰天記念礼拝」

終えた。壇上にはアームストロングと同志社の旗にはさまれてケリー教授のこやかな写真が吊るされ、教授は参加者になお何事を語りかけているかのようにであった。

である中野勇氏（元アームストロング館管理人）の熱誠こもる感話（盛大な拍手が起った）、ケリー先生の強力な支援者だった上野直蔵元総長の夫人久子さんの挨拶、アームストロングにおける初代新島スカラー榊原胖夫名誉教授、同志社、東大、早稲田の教授を歴任し、現在同志社の法科大学院で教えている藤倉皓一郎教授の、それぞれに感銘深い感話があった。アリス・ケリー夫人がケリー家を代表して日本語で挨拶を述べ、竹中名誉教授の祝福をもって、記念礼拝を

偲ぶ会

夜にはウエスティン都ホテルにおいて、「ケリー先生を偲ぶ会」が催された。野本真也理事長の挨拶、井上勝也教授による「教育者としてのケリー先生」という簡潔的を射た講演、ケリー家の四人の子供たちのスピーチ、友人、教え子等が次々に思い出を語り、先生が愛したルイ・アームストロングの歌に耳を傾けたあと閉会となった。

人間になる教育

ケリーさんは、熊本のジェインズ、札幌のクラークに匹敵する、または彼らを上回る存在だったと私は考えている。クラークは札幌に8か月、ジェインズは熊本に5年滞在し、学生たちに強烈な人格的影響を与えた。ジェインズもクラークも日本語ができなかったが、ケリーさんは日本人と変わらぬほどの日本語を話し、学生たちとのコミュニケーションには常に日本語を用いた。アームストロング大学代表として同志社に着任したのが1947年であり、同志社を定年退職したのが1992年だったから、同志社での期間は45年にわたる。しかし、彼がジェインズやクラークに匹敵する影響力を教育的に駆使することができたのは、最初の17年間くらいであったのではなからうか。つまり27歳から44歳の働き盛り、そして日本は敗戦直後の激動する時期であった。私自身はアームストロングという「ケリー塾」で、先ず「人間になる」教育をしてもらったことを、生涯の好運であった。



アリス夫人とともに 1992年
(['ありがとう チャン、アリスさん』1993年)

たと感謝している。山陰の片田舎から出てきた若者、そして敗戦まぎわに5か月間だけ帝国海軍の学校で鍛えられた若者にとって、軍国主義の教育が作りあげてきたナシヨナリズムの残滓を克服して「人間」になること、次に「世界市民」になることは、容易でなかった。ケリーさんは「ケリー塾」の先頭に立つことなく、常に横にいて、脱落しそうな若者をくいとめてくれた。ケリーさんとは何でもしゃべることができた。ケリーさんは確かに「アメリカ」であったけれど、アメリカを超越していた。私がアメリカとイギリスの大学の奨学金を同時に得たとき、どちらを選ばべきかを迷って相談にいくと、ケリーさんは言下にイギリスを奨めた。

ニックネーム

1948年6月に、戦後アーモスト館がケリー館長の下で国際学生寮として再開され、最初の寮生9人が新制同志社大学1年生、2年生の中から選ばれて入寮した。寮生たちはニックネームで呼び合うことになった。それは、先輩後輩の関係を作らずに対等につきあい、対等に議論するための場を設定するのに極めて有効だった。陸軍士官学校にいた寮生は「陸さん」と呼ばれたが、それはケリーさんが、日本海軍が陸軍のことをそう呼んでいたことを知っていたからである。当時の寮生たちはキリスト教かマルクス主義か、といった議論を繰り返し戦わせた。熱い議論の末、洗礼を受けることが必然と思われる状況に押しやられ、私はクリスマスチャンになってしまった。私の受洗をもっとも喜んでくれたケリーさんに対する感謝の気持ちは、とうてい言い尽くすことができない。

オーテス・ケリー

(Otis CARY 1921~2006年)

略歴

北海道小樽市生まれ。1946年アーモスト大学卒業、続いてエール大学で歴史学（日米交流史）を専攻（51年 M.A. 取得）。48年新制同志社大学教養学部教授、初代教務部長。52年大学文学部助教授、56年教授。47年~80年同志社アーモスト館館長。この間、学校法人同志社理事、神戸女学院理事、梅花学園理事、国際文化会館理事等の要職を歴任。84年京都府文化功労賞、87年勲三等瑞宝章、89年京都市文化功労賞。主な著書に『日本開眼』（法政大学出版局、1952年）、『日本との対話』（講談社、1968年）、『よこ糸のない日本』（サイマル出版会、1976年）ほか、訳書など多数。